

江戸の食文化を支えた

漁場としての江戸前



広重「名所江戸百景 永代橋佃しほ」(国立国会図書館デジタルコレクション)

下町文化

NO. 268
2015.1.16

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
<http://www.city.koto.lg.jp/>

- 江戸の食文化を支えた
漁場としての江戸前
- 「黒江町の魚市場」を読む
ー視覚資料としての古写真ー
- 城東の村を歩く⑦
荻新田
- 江東区芭蕉記念館企画展
武家の文人
ー秀頼・幽斎などから定信・海舟までー
俳文学者の写した『おくのほそ道』
ー久富哲雄のファインダーを通してー
- 平成26年度中川船番所資料館特別企画展
かえってきた羅漢さま
- 文化財まめ知識③
江東区内の水盤

江戸前の風景

江戸前は、前号で記したように、砂洲に覆われた遠浅の海でした。そこで捕れた魚介類は、江戸の食文化を支えるとともに、江戸の人々が海を身近に感じる場でもありました。その風景は錦絵に描かれ、天保9年(1838)刊の『東都歳事記』にも次のように記されています。

芝浦・高輪・品川沖・佃嶋沖・深川洲崎・中川の沖、早旦より船に乗じて、はるか沖に至る。卯の刻過より引始めて、午の半刻には海底陸地と変ず。ここにおりたちて蠣蛤を拾ひ、砂中のひらめをふみ、引残したる浅汐に小魚を得て宴を催せり

この一文には、江戸前の海の豊かさばかりではなく、描かれています。船で沖へ出ると、汐干とともに砂洲が陸地(干潟)になり、そこには牡蠣や蛤が豊かに生育していました。そして、足もとの砂の中にはヒラメが隠れ、海水が引いた後に残る汐だまりで小魚が獲れるなど、海の恵みを容易に享受できたことがわかります。江戸前の海が当時の人々にとって、どのような存在だったのか、その日常的な風景を知ることができる、とても興味深い内容といえます。

(2頁へ続く)

三月三日は例年、海上大汐干潟となる。故に深川の洲先、品川の海上に汐千狩に出づるもの少なからず。蛤を拾い、貝類をあさりし人を遙かに望めば豆人の如く

の人々が気軽に海を樂しむ場として身近な存在であり、獲つてきた新鮮な魚介類は、さまざまな料理の食材に

江戸前の海の恵みは、食文化の発展にも大きな影響を及ぼしました。江戸前寿司の魚介類は、鮮度が高く、良質な素材であったことから、江戸の人達はその味を存分に楽しんだことでしう。

江戸時代の社会や風俗を記録した喜多川守貞の『近世風俗志』（原題「守貞謾稿」）には、「握り飯ノ上ニ、鶏卵ヤキ、鮑、マグロサシミ、海老ノソボロ、小鯛、コハダ、白魚、蛸等ヲ専トス」「江戸、今製ハ、握リ鮓也。鶏卵焼、車海老、海老ソボロ、白魚、マグロサシミ、コハダ、アナゴ甘煮長ノマ、也」とあり、当時好まれた握り寿司のネタが書き上げられています。卵焼き、海老、マグロサシミ、小鯛、コハダ、白魚、アナゴなど、現在でも人気があるものばかりです。

玉子

 湯玉

 依湯玉

 湯玉

 湯玉

 湯玉

 湯玉

 湯玉

 湯玉

 湯玉

 湯玉

上から、玉子、玉子巻、飯、海苔ヲ交ヘ干瓢ヲ入ル、海苔巻
かんぴょう干瓢ヲ巻込、あら同鹿同上、アナゴ、白魚、中結干瓢、刺ミ、刺身及
 ビコハダ等ニハ飯ノ上肉ノ下ニ山葵ヲ入ル、コハダ

同書（部分）、寿司の図 国立国会図書館デジタルコレクション

いずれにしても、当時の握りは江戸前の魚介を基本とする、江戸つ子自慢の一品であつたことは間違いないでしょう。

江戸前の海に関連してもう一つ。栄
要豊富な砂洲は、海苔生産の場として
も適していました。

江戸の海苔は、浅草海苔のブランド名で全国的に知られていましたが、海苔自体は品川・大森辺りで養殖されました。古くは、寛永15年（1638）の『毛吹草』に「下総国 葛西^{のり} 是ヲ浅草苔トモ云」とあり、現在の江戸川区辺りの海苔を「浅草苔」と称えたことがわかります。また、正徳2年（1712）の『倭漢三才図会』^{わかんさんざいずえ}「紫菜^{あまのり}」の項にも葛西地域の海苔採取の記述が認められます。しかし、享保

17年（1732）に成立した『江戸砂子』には、「浅草海苔、当所の名物。むかしは此ちかき辺まで入江なりしと也。今は品川海苔を当所にて製す」とあり、江戸時代中期の享保期には品川で生産された海苔を浅草

海苔の研究に大きな功績を残した岡
本金太郎氏は、その著書『浅草海苔』
の中で、江戸時代後期の『東都歳事記』
や『新編武蔵風土記』、さらには浅草
海苔商人の記録などから、元禄・宝永
(1688~1711)の頃には品川辺
りで養殖がはじまったとしています。

一方、深川浦・砂村の海苔養殖の開始は、江戸時代ではなく明治19年（1886）でした。前面の海に広がる砂洲は十分な養殖環境を備えていたことに加え、養殖を試みようとする江戸時代の絵図が残されているにもかかわらずです。その理由は不明ですが、江戸の人々にとって生産・娯楽などの場であった江戸前の海は、幕府にとっても重要で、一定期間占有する海苔養殖を認めることができなかったのかも知れませんね。

(文化財主任専門員 出口宏幸)

「黒江町の魚市場」を読む

—視覚資料としての古写真—

今の私たちが過去のことを振り返る際、古文書や古地図などを用いますが、明治時代以降、新たな技術として取り入れられた写真は、特に視覚に直接入ってくるという意味で効果的な資料といえましょう。

例えば、今回取り上げるこの写真は、「黒江町の魚市場」と題され、大正15年（1926）に刊行された『深川区史』に収録されています。その説明には「黒江町の電車停車場の南側歩道に毎日午過ぎから魚の小売市が立つ。ここでは築地の市場から来る魚も扱ふがそれらと混って地のものをも鬻いでゐる。不動の縁日などに夕方雑沓してゐる中を縁喜ものをささげて蛤や浅蜷や



黒江町の魚市場（『深川区史』）

シジミやさてはカレイやコチ等、時には生洲に泳がせてゐるのを素見して行く有様は深川

気分の濃厚な一つの場面と見受けられる。」とあり、深川区の南西部が漁業の町であったことを教えてくれます。

写真資料が古文書や古地図などと異なるのは、写真を撮った人などが、写真紙焼の裏側に日付や場所などを記録してくれないと、撮影に関する情報が残らないことにあります。この「黒江町の魚市場」は『深川区史』の口絵ですが、『深川区史』は大正11年に深川区史編纂会が設置され、順次資料収集と編纂作業を進めていました。ところが、翌年9月に関東大震災により、脱稿した稿本などが焼失してしまいました。その後、同14年1月から新たに書き直すこととなり、付図や写真などの収集も行っています。この過程において「黒江町の魚市場」も集められたことと考えられますが、この写真は果たしていつ頃の写真になるのでしょうか。

写真をよくみてみると、何点か文字が確認出来るものが写っています。ひとつは中央よりやや左側にある電信柱の広告「キリン香油」です。そして、そのやや右奥にもう一つ看板があり、

拡大してみると「六月二十一日開業 小風銀行」という文字が確認できます。この小風銀行について調べてみると、銀行図書館の「銀行変遷史データベース」から開業が大正12年6月21日であることがわかります。開業の看板であるという性質上、何年も放置されているとは考えにくいことから、この写真は関東大震災の直前の黒江町を撮したものと思われます。



黒江町の魚市場（拡大）



【図】黒江町付近の地図

写真の場所にあたる黒江町の魚市場は、【図】地図（大正元年「東京市及接統郡部地籍地図」の「加賀河岸」にあたります。大きな道が二つに別れていますが、これは現在の永代通りと葛西橋通りにあたります。両方の道に路面電車が通っていますが、写真にうつる路面電車はちょうど人の乗り降りが確認でき、ここが電停であることが分かります。

この写真からは、色々なことが読み取れます。震災直前の建物は江戸時代以来の木造建築と近代に登場する看板建築が両方見られます。隅田川東岸の佐賀町あたりは倉庫業を中心に金融業などが展開していました。この大通り沿いに看板建築が見られるのは、街の近代化が進んでいたことをあらわしています。また、魚市場は、桶や板などを使って露店を設置して、皿などの上に魚を載せています。加賀河岸のみならず、現在の永代通り沿いまで露店は伸びていて、魚市場を覗いているのは男性が多く、かなりの人が当時流行はじめていた「カンカン帽」をかぶっています。このように古写真は年代・場所が分かると過去の情報を視覚的に把握できうる重要な情報を含んでいるのです。

（深川東京モダン館 副館長 龍澤潤）

荻新田

今回から砂町地域の村を紹介しま
す。小名木川以南の地域の村々は、はっ
きりとした成立年が定かでない村もあ
りますが、元和（げんな）万治年間（まんじ
1661）頃までに起立したとされ
るところが多く、天正18年（てんしやう
1590）以降に小名木川が開削され、北岸地域
の村ができたのち、開発に着手され
たと思われまふ。

荻新田開発の言説

そうした砂町地域の新田村の中
も、比較的早い時期に開発されたのが
荻新田です。『砂町誌』（大正15年）に
よると、大和国（奈良県）平方村出身
の荻氏兄弟が元和年間に移住して開墾
を行い、その名から荻新田と名付けら
れた、とされます。

一方、この荻新田の開発にはも
う一つ、河内国（大阪府東部）枚方
の荻氏兄弟が慶長年間（けいちゃん
1596～1615）に移住して開拓した、とす
る説があります。この説は、『城東区
史稿』（昭和17年）などの主要な自治
体史にも記されている説ですが、その
初出と思われる記述は、『南葛飾郡神
社要覧』（昭和7）にみられます。

ところで、この説を聞いて似たよう

な話を思い出しませんか。実は慶長説
は以前、本シリーズで紹介した大島地
区の「平方村」と酷似した由来なので
す。小名木川を挟んで向かい側に位置
するとはいえ、異なる村の起立の由緒
が、同じ内容になることはあるでし
うか。絶対ないとはいえませんが、一
つ考えられるのは、『南葛飾郡神社要
覧』が平方村と荻新田を取り違えてし
まったということです。そして、慶長
説がそのまま広まってしまったのでは
ないでしょうか。

現在、いずれの説かを確定する確実
な史料がないことから、断定はできま
せん。しかし、荻新田周辺の村の多く
が寛永期頃の成立であることと、後述
する上妙寺の歴史と文化財がその答え
のヒントを与えてくれます。

上妙寺と荻氏

荻新田の成立に深く関わる荻氏に
まつわる由緒と史跡が残るのが上妙寺
（東砂1）です。上妙寺は、寛永2年
（けいちゃん2 1625）に開創されたとされる日
蓮宗寺院で、荻氏がその所有地を寄進
し、開山日財上人を招いて建立したも
のといわれます。

境内には、この荻氏の墓も残されて
おり、「荻家歴代墓」として区登録史
跡となっています。区内村落の開発者
の墓地が現在も残されている事例は珍

しく、江戸時代以来の江東区の歴史を
物語る貴重な文化財です。

また、上妙寺は江戸時代に高潮被害
を受けた際、境内から「海中出現鬼子
母神」と称される神像が発見された
といわれ、以来、鬼子母神信仰の地と
して村内のみならず、江戸の人々にも信
仰されました。そのため、江戸市中か
ら来た人に道案内をする道標が建立さ
れます。現存しているのは神田小柳町
の商人達が文化10年（けいなん10 1813）に再
建したもので、区指定有形民俗文化財
となっています。



鬼子母神道道標

墓石の銘文

ところで荻氏の墓石には、最も古
い年代で「最善院宗円」「寛文九年」
（けいぶん9 1669）の文字が刻まれ、荻氏初
代を指していると思われます。この前
提で開発年代を考えると、慶長説では
慶長20年（けいちゃん20 1615）としても、荻氏
が没したのは、かなりの高齢となりま
す。しかし、実際は移住時にはすでに
開発を指導できるだけの経験を積んだ
年齢だったと考えられ、慶長説にはや
や無理があるかもしれません。

以上から、荻新田の開発は元和説の

方が比較的自然と考えられます。しか
し、本考察も推論に依るところが大き
く、新たな史料の発見が望まれます。

妙法稲荷神社

その他の荻新田に関係する文化財と
しては、妙法稲荷神社の「石造鳥居
明治14年在銘」があります。鳥居の銘
文には奉納者として「荻新田」「氏子中」
と記されています。荻新田は、明治22
年に周辺村と合併して、砂村（現在の
北砂・東砂・南砂）となりますが、そ
れまでは江戸時代の村域のまま存続し
ていました。



石造鳥居
明治14年在銘

妙法稲荷神社は、『葛西志』（文政4年
（げいさい4 1821））にも記載がある江戸時代
以来の神社で、荻新田の鎮守として祀
られてきました。文化財の鳥居は、妙
法稲荷が近代以降も村の鎮守として地
域の人々の信仰を集めていた証しです。

（文化財専門員 斉藤照徳）

◆武家の文人

一秀頼・島崎などから定信・海舟まで一

◆俳文学者の写した『おくのほそ道』

一久富折雄のフアイレダーを通して一

12月18日(木)～4月19日(日)まで

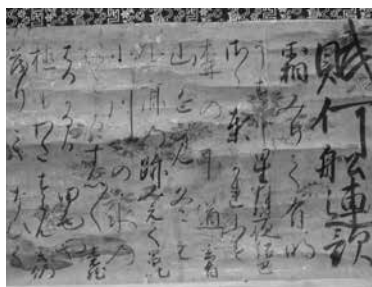
武家は、武士の家柄を指す武士一般の総称です。江戸時代では、將軍、大名、幕臣(旗本・御家人)、陪臣などがそれにあたります。武家にとって、学問や文芸などの教養は武芸とともに大切なものでした。なかには大名文人や大名俳人などと呼ばれ、当時の文芸をリードする人たちも現れました。

本企画展では、武家の文人としての側面に焦点をあて、和歌・俳諧・絵画などの作品を展示します。豊臣秀吉の子、秀頼筆(伝)の色紙にはじまり、幕末の三舟と称された高橋泥舟の句短冊、勝海舟の歌短冊まで、江戸時代に活躍した武家の作品です。作品からは、政治家として手腕をふるった藩主や幕末の志士たちの、文人としての一面を知ることができます。

主な展示資料をご紹介します。

「里村紹巴」一座 賦何船連歌断簡幅

【写真①】は、文禄2年(1593)10月23日に興行された百韻の初折22句が貼り込まれています。賦物連歌とは、



写真① 賦何船連歌断簡幅(部分)
あらかじめ設定された事物の名などを共通のルールで詠み込んで作句する連歌様式です。

本点では船が題材となっています。連衆は、和歌・連歌作者で肥後熊本藩細川氏の祖、幽斎玄旨(細川藤孝)のほか、紹巴など13人です。紹巴は連歌師で、多くの地方武将と交流がありました。

「真田菊貫筆「立帰」句短冊」【写真②】の作者は、信濃国松代藩6代藩主、真田幸弘です。恩田木工を起用して藩政を立て直した『日暮硯』が有名です。俳諧は蓼太門、和歌を賀茂真淵、平林惇信に学びました。



写真② 真田菊貫句短冊

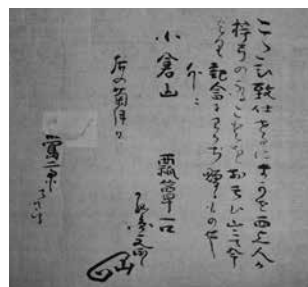
この他大名の作品として、出羽庄内7代藩主で致道館を創設した酒井忠徳(凡兆)の句短冊、函館戦争で功績を挙げた陸奥国弘前藩最後の藩主津輕承昭の歌短冊などを展示します。

「松平定信筆和歌画賛三幅対」(個人蔵)【写真③】は初公開資料。鶴沢探索の画に賛が定信筆の和歌です。松平定信は、陸奥白河藩主として天明の飢饉に際し窮民の救済にあたり、その後、老中首座になり寛政の改革を断行しました。政治家としての定信はよく知られるところですが、教養が深く、著述や作歌も多くあり、文化人としても優れた業績を残しています。



写真③ 松平定信筆和歌画賛三幅対

また、今回特に、トピック展示として「大名俳人松平四山(直興)所蔵の句空宛芭蕉書簡」のコーナーを設けました。当記念館は、故真鍋儀十翁の俳諧コレクションの寄贈によって、昭和56年に開館しました。その真鍋翁コレクションの一つに「句空宛芭蕉書簡」があります。この書簡には裏書があり【写真④】、孤田斎という人物の所蔵であったことがわかります。



写真④ 句空宛芭蕉書簡裏書
実はこの孤田斎は、大名俳人として知られた出雲母里藩1万石の第8



写真⑤ 四山旧蔵小倉山瓢筆

とされています。真鍋翁コレクションの中にも、同じく四山所蔵の「小倉山瓢筆」があります。【写真⑤】。

ところで、当館では、平成11年、俳人であり俳書等の収集家である神谷瓦人氏のコレクションを入手しました。その1000点を越える資料群の中に、瓢界叟(四山)の「打水や」句短冊が含まれていたのです。

今、170年の時を経て、かつて四山(直興)の所蔵した芭蕉書簡、瓢筆、そして句短冊が、この記念館で再見を果たすことになりました。

【芭蕉記念館 問合せ】

☎03(3631)1448

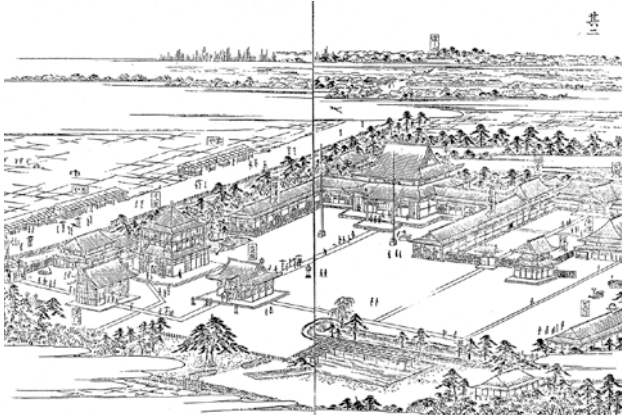
かえつてきた羅漢さま

中川船番所資料館では10月22日～11月24日にかけて、特別企画展を開催しました。今回のテーマは「かえつてきた羅漢さま」。かつて江戸名所として知られた大島^{おおしま}にあった五百羅漢寺の歴史や規模、大島に創建されたことと背景を知っていただくための企画で、現在目黒区に移転している五百羅漢寺の全面的なご厚意のもとで、3体の羅漢像をも借用し、観覧いただくことができました。

このテーマは、江東区に伝えられてきた歴史や文化、地域の成り立ちと変遷を知っていただくことを目的とした、郷土資料館として事業展開してきた本資料館にとって、いずれは手がけなければならないテーマでした。本展示の概要をご紹介します。

1、大島と羅漢寺

都営新宿線西大島駅交差点近くに、



江戸名所図会 五百羅漢寺(左面)

かつて天恩山^{てんおんざん}五百羅漢寺^{ごひゃくらかんじ}という、大寺院がありました。

現在も同じ場所に羅漢寺があります。現在のお寺は明治36年(1903)に奥多摩の水川から転入してきた祥安寺が、昭和11年(1936)地域に親しまれてきた「羅漢寺」の寺号に改称して、存続しているお寺です。

元禄8年(1695)に創建された五百羅漢寺には、536体の羅漢像が堂内に安置され、荘厳さを誇っていました。しかし幕末の安政の大地震で堂宇が倒壊し、多くの羅漢像が破損しました。さらに明治初年の廃仏毀釈の嵐を経て、大島での羅漢寺は往時の面影を失ってしまいました。

その後は明治20年(1887)本所緑町(墨田区)へ、さらに同41年(1908)下目黒へ移転しました。目黒不動からほど近い場所にある五百羅漢寺には、現在も300体以上の羅漢像を安置しています。このたび、五百羅漢寺のご厚意により、3体の羅漢像と絵画・扁額などの貴重な寺宝をお借りし、特別企画展として開催することができました。

2、展示の概要

最初のコーナーは「羅漢寺の周辺」です。嘉永4年(1851)に作成された「改正本所猿江亀戸辺図」では、羅漢寺境内の本堂やさざえ堂などを絵入りで記しています。現在の江東区東部、城東方面と墨田区東部が入った地域の地図で、絵入りで紹介されているのは、羅漢寺と亀戸天満宮だけです。「南本所羅漢寺より中川迄」(深川江戸資料館蔵)という肉筆の絵図中でも、羅漢寺は境内地を赤く塗りこめて紹介されており、その規模の大きさをうかがうことができます。さらに現在の地図上にかつての境内地を落とした図も展示しました。現在の羅漢寺、東側の古書店、コンビニ、城東保健相談所、江東都税事務所、ファミレス、新大橋通り、総合区民センターなどが含まれます。寺の周囲を取り囲んでいた

細い堀川は、今も道路として残っています。

次のコーナーは「帰ってきた羅漢さま」です。このあたりから



梱包作業(羅漢寺にて)

羅漢寺から借用した資料が多くなります。まずは羅漢像の製作者であり、羅漢寺を興した松雲^{しょううん}元慶^{げんけい}禅師の紹介です。彼は京の仏師で、鉄眼^{てつがん}禅師について黄檗宗^{おうはくしゅう}の修業をしていました。九州豊前の耶馬溪^{やばけい}の石造五百羅漢像を目にした松雲は、木造での五百羅漢像の製作を決意します。江戸に下り元禄4年(1691)から製作を開始して10年間に536体の羅漢像を彫り上げたといえられています。「松雲禅師羅漢彫像図」(羅漢寺蔵)は伊藤晴雨^{いとうせいう}が描いた想像図ですが、浅草蔵前の豪商たちの後援もあって、浅草寺境内に工房を構えて彫り進められたと言われ、このことが参詣の人々への周知にもなりました。やがて、この一大事業は、5代将军徳川綱吉や生母桂昌院^{けいしょういん}の知所となり(『徳川実紀』)にもこの2人が別の日に浅草寺に参詣している記述が見られます)、幕府の後押しを受けて、

大島村に羅漢寺が創建されました。羅漢寺の開山は松雲禪師のはずですが、彼は自分の恩師である鉄眼禪師を初代住職に開山にしました。

このコーナーで展示した羅漢像の胎内から発見された文書に、「駒込近江屋長七 西岸妙方信女 教山童子 梅春童女」と書かれています。近江屋の商売は分かりませんが、主人の長七が、先だった自分の妻や子どもの冥福を祈って羅漢像を奉納したことが分かります。当時の人々、貴賤に関わりなく寄付をした人の思いのこもった羅漢像であったことが、江戸でも「前評判」となったでしょう。

次はいよいよ羅漢像の展示です。『江戸名所図会』に収められた「五百羅漢



展示風景

堂内相之図」の長尺な絵図を背景に、3体の羅漢像を展示しました。羅漢は釈迦の教えを高いレベルまで身につけた尊者で、中国から伝えられた「黄檗様」という服装・身なりをしています。

今回の3体は、松雲禪師が製作した第1号の「阿若憍陳如尊者」、入浴中の姿で水を湛えた手桶を携えた「思善識尊者」、浅野内匠頭が奉納した「威徳声尊者」です。像はヒノキの寄木造りで、首や胴の前後、両腕などの部材に分かれます。こうした像を10年ほどの間に作り上げることは不可能でしょう。松雲禪師一人の作ではなく、松雲を中心に形成された仏師の集団によって、分業体制で製作されたとみるべきと考えます。

合わせて展示した、『造立寄進者簿』（羅漢寺蔵）には「浅野氏長矩 内匠頭侯御事 同 内室 浅野氏長広 大学侯御事」と記されており、赤穂事件が起こる7、8年前に、あの内匠頭が奉納していたことが分かります。

このほか境内にあった名物の「高層建築」、さざえ堂の入り口に掲げられていた扁額（安永9年 1780）や羅漢寺の北方、亀戸に住んでいた歌川国貞（3代豊国）が描いた阿弥陀如来像の版本などを展示しました。

最後のコーナーは「江戸の名所



歌川国貞が描く阿弥陀如来像

五百羅漢寺」です。葛飾北斎「富嶽三十六景 五百らかん寺さゝもどう」や歌川広重「名所江戸百景 五百羅漢さゝも堂」をはじめ、江戸名所だった羅漢寺の浮世絵は数多く残されています。また、天保10年（1839）に書き残された道中記のなかで鹿島神宮や香取神社方面を参詣した人が、「本庄（所）五百羅かん江上り参詣つかまつり候」と記しており、江戸を訪れた人の観光スポットでもありました。以上が展示の概要です。

3、区の郷土資料館として

羅漢寺は、江戸を代表する名所として知られ、『江戸名所図会』の紹介文の中でも「河東第一の名藍」と謳われています。「昔のままに大島にあればよかったのに」、といった声も会場で

聞かせていただきました。もしも明治初年の廃仏毀釈の「荒波」を潜り抜け、大島で存続したとしても、おそらく堂宇や羅漢像は70年前の戦争、空襲で灰燼に帰したことでしょう。

目黒に移ったからこそ残すことができた、貴重な羅漢像です。ぜひ皆様も目黒の五百羅漢寺へ一度足を運ばれてはいかがでしょうか。

期間中は2065人の来館者がありました。これは特別企画展の実績としては過去最高です。今回のテーマは、江東区や大島地域の方には、幾分なじみのあるテーマでしたが、昨年度開催した「江東のお富士さん」のような世界遺産登録を背景にした「派手さ」はありません。しかし大島村に創建された羅漢寺の成立と展開は、一寺院の歴史にとどまるものではなく、この地域の歴史を知るうえで、不可欠の課題でもありました。ここにこそ、本展示の骨格があり、それが館の使命を果たすことにもなりました。

今後も区の歴史的環境の整備と提供を心がけ、皆様に「江東区ってこういうふうにしてきたんだ」「だから江東区の町はこうなったんだ」と納得し、楽しんでいただける事業をお届けしたいと思っています。

（中川船番所資料館 久染健夫）

文化財まめ知識3

江東区内の水盤



水盤は、社寺の境内などに置かれている、石材で作られた水槽です。神社を参拝した際に、身を清めるための手水舎（てみずや、ちようずや）に大きな石製の水槽が置かれ、その上に柄杓が並べられた光景をご覧になったことはありませんか。現在、江東区では46件の水盤を登録有形民俗文化財として、1件を指定有形文化財（工芸品）としています。

様々な意匠の水盤

水盤の正面には「奉納」「奉獻」などの文字が刻まれることが多く、正面や背面などには奉納した年月や奉納者名などが刻まれます。なかには意匠を凝らしたものもみられます。

亀戸浅間神社（亀戸9）の水盤は、富士講の山玉講が寛政7年（1795）に奉納したもので、正面には「奉獻」の二字とともに山型の模様と「玉」の字が刻まれており、「山玉」と読めるようになっています（①）。



①水盤 寛政7年在銘

大島稲荷神社（大島5）の水盤（②）は、年代は不明ながら江戸時代に町火消九組が奉納したもので、本体を支える台石は纏（まと）をかたどったような形をしています。九組は、



本所・深川に編成された町火消の組合のひとつで、深川猿江町・上大島町・下大島町辺りを受け持っていました。

中央寺（南砂4）の水盤の両側面には、一石から彫り出した龍の飾りが施されており（③）、水をかけると生き生きとした感じがしてくると言われています。

霊巖寺（白河1）には多数の水盤があります。なかには大名家の紋がみられるものがあり、近江国（滋賀県）膳所藩主本多家の墓前にある水盤の正面には本多立葵紋が浮き彫



③水盤 文久2年在銘



④水盤 安政6年在銘

りにされています（④）。江戸鋳物師の制作した水盤

富岡八幡宮（富岡1）の境内にある水盤は、現在も手水舎で使用されています（⑤）。享和3年（1803）5



月に、世話人近江屋藤兵衛他4名などをはじめ、合計290名の人々によって奉納されたものです。石製の水盤を青銅板が包ん



⑥正面左下の脚

でいますが、外見からは青銅板の継ぎ目がわからないように仕上げられています。下部の四隅に付けられた脚には渦を巻いた雲がデザインされています（⑥）。作者は神田の鋳物師太田駿河守藤原正義（政義）「正義」「政吉」の刻銘の作品もありです。この水盤は、江戸鋳物師の貴重な事例であり、その技術を現代に伝えるものであるため、江東区の有形文化財（工芸品）に指定されています。

（文化財専門員 金井貴司）

情報コーナーから

2階左奥の情報コーナーでは、区民の方からご寄贈いただいた、昔の生活道具を展示しています。1カ月程度を目安に、展示内容を変えてまいりますので、ご来庁の際はぜひご覧ください。

1月中旬からは、鶯替えの鶯と昭和（戦前）の亀戸天神が写った絵ハガキを展示する予定です。鶯替えは、毎年1月24日・25日に行われますが、歴史的には文政3年（1820）に始まり、悪事を善事に変えるとのいわれがあります（『東都歳事記』）。



写真を見ると、社殿入口左側の看板には、鶯の取換所を示す文字も見えます。お楽しみに。

表紙

歌川広重の「名所江戸百景 永代橋 佃しま」です。永代橋の橋脚の向こうに見えるのは、篝火（かがりび）を焚いて白魚を獲る佃島の船の一部です。画には、白魚漁の風景と停泊する廻船、奥に小さく佃島が描かれ、その先には江戸前の海が広がっていました。